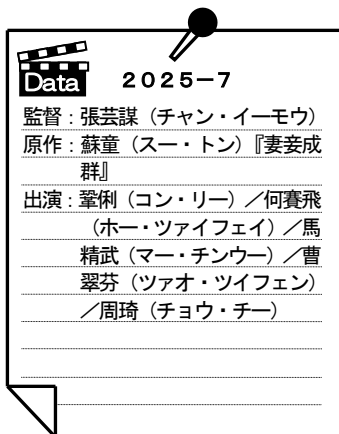




みどころ

TV では観たものの、本作の大スクリーンでの鑑賞は今回が初！火がともされた灯籠の紅色は如何に？「紅いコーリャン」(87年)に続く鞏俐(コン・リー)の花嫁姿は如何に？足裏叩きの鈴の音と新妻の恍惚の表情は如何に？

そんな期待にたがわぬ125分だったが、陳家における第一～第四夫人に召使の少女も加えた女5人の権力争いとドロドロした嫉妬ぶりは、日本で2023年に大ヒットしたTVドラマ『大奥』シリーズと対比すれば一層興味深い。

なお、第三夫人が語る(歌う)京劇のセリフがなぜ字幕表示されていないの？その疑問に誰か答えてくれる人はいるだろうか？

■劇場で初鑑賞。TV 放映とは異質の感動を！■

今回シアトル梅田が開催した「張芸謀 艶やかなる紅の世界」で上映したのは、初期の3作品たる『紅いコーリャン』(87年)、『菊豆』(90年)、『紅夢』(91年)。私は、このうち『紅いコーリャン』と『菊豆』を、シネ・ヌーヴォーが2004年6/19～7/30に開催した「中国映画の全貌2004」で鑑賞したが、本作は見逃していた。しかし、「本作は必見！」と考えていたので、その後TV放映された時にしっかり鑑賞し、大きな感動を覚えたが、映画館での鑑賞でなかったため、評論は書いていなかった。私は、張芸謀(チャン・イーモウ)監督作品のほとんどを鑑賞し評論を書いているから、そのことがずっと気にかかっていたが、今回初めて本作を映画館で鑑賞し、その感動が心の中に残る間に評論を書くことができて、超ハッピー！

しかも、本作の鑑賞時には、鞏俐(コン・リー)の下記Aのポストカードをもらうことができた。これは、『菊豆』を鑑賞した時にもらった下記Bのポストカードと服装がよく似ているが、彼女の表情を見れば、全く「似て非なるもの」であることがよくわかる。な

ぜなら、B は鞏俐演じる菊豆が絶望のどん底にある時の姿であるのに対し、A は鞏俐扮する本作の主人公・頌蓮（スンリエン）が、陳佐千（チェン・ズオチエン）（馬精武／マー・チンウー）の第四夫人としてお屋敷に入る時の幸せの絶頂時（？）の表情だからだ。

【ポストカードA（本作鑑賞時に受領）】 【ポストカードB（『菊豆』鑑賞時に受領）】



「サユリスト」の私にとって、1945年3月7日生れの吉永小百合がもうすぐ80歳になるのは驚きだが、『紅いコーリャン』で17歳でデビューした鞏俐も、張芸謀監督の『妻への家路』（14年）（『シネマ44』103頁）で再びタッグを組んだ時は既に50才近くになっていたはず。したがって、同作のチラシに写る鞏俐の顔を見れば、当然それなりに老けているのは仕方がない。今や三浦友和夫人としてしっかり家庭を守りつつ、立派に成人した子どもたちの芸能活動を見守っている山口百恵の近時の素顔は知らないが、このAとBの写真を見れば、鞏俐が「中国の山口百恵」と呼ばれる由縁に納得！

■□■嫁入り風景と紅色の強調は、デビュー作と同じ！■□■

張芸謀監督がデビュー作に選んだのは、後にノーベル文学賞作家になる莫言の「赤い高粱」だった。それに対して、彼が第3作目の原作として選んだのは、私が2008年4月2日に毛丹青氏とともに「中国の人気作家『蘇童』が行く関西の旅 歓迎座談会」に出席して初めて知った蘇童の原作『妻妾成群』だ。もちろん、私はその原作を読んだことはなかったが、同作も『紅いコーリャン』と同じく、花嫁に扮した鞏俐が嫁いでいくシーンから

始まるので、それに注目！

両作に共通しているのは、1920年代の中国の貧しい田舎における「金で買われていく嫁入り」は、決して幸せが約束されたものではない、ということ。逆に、両作が全く違っているのは、『紅いコーリャン』は神輿に乗せられた花嫁が、ド派手な演奏の中で担がれて嫁いでいくのに対し、『紅夢』は鞆俐扮する花嫁・頌蓮が1人でトランクを持ち、徒歩で嫁入り先の陳佐千の屋敷に入っていくことだ。この“第四夫人としての嫁入り”ははっきり言えば、金で買われて嫁いだものだということを頌蓮はあらかじめ了解しているから、そこは割り切ったもの。陳家の慣わしに従って服を着替え、身体を清めて、初夜の床を待ったのは当然だが、そこでビックリさせられるのは、足裏叩きの風景だ。ちなみに、私は約3年間、毎週日曜日ごとに60分の足裏マッサージの施術を受けているが、これはまさに至福の時間。痛さと心地よさのバランスは、押す強さと健康状態によるが、今や私の足裏は最強！当初、悲鳴を上げていた押しの強さでも、今は夢見心地になっているからすごい。ポストカードに写る新妻が、鈴の音とともに足裏を叩かれる快感に浸る表情はまさに絶品だ。陳佐千が若くて美しく、しかも大学を中退したという第四夫人に興味を示したのは当然だから、当面は陳佐千の通い先が第四夫人が住む第四院に集中したのは当然だ。

なお、陳家の慣わしは、陳佐千が通うことになった夜には、その夫人の院の赤い灯籠に火が灯されるとともに、家族5人、つまり陳佐千+4人の夫人で囲む夕食の席では、その日に指名された夫人の好みで献立を決められる特権が与えられることだが、さて頌蓮の鉤物はナニ？陳佐千の寵愛が嫁入りしたばかりの第四夫人たる頌蓮に集まり、第四院の灯籠に夜ごと火が灯されたのは、ある意味で当然だが、それを見守る第一、第二、第三夫人の対応は？

■□■第一、第二、第三夫人の対応は？召使いの対応は？■□■

足裏叩きの後に頌蓮は予定どおり床に入り、灯籠が無数にかけられた第四院に入ってきた陳佐千とめでたく初夜の契りを結ぼうとした時、何と第三夫人の梅珊（メイサン）（何賽飛／ホー・ツァイフェイ）が急病だと、陳佐千が呼び出されて出ていったから、アレレ、アレレ？しかし、それって本当？それとも・・・？また、頌蓮が陳佐千の屋敷に入った時、最初に対応したのは第四院専用の召使いとなる雁兒（イエンアル）（孔琳／コン・リン）だが、これが見るからに反抗的だから、アレレ、アレレ。それは、第四夫人に収まるのはてっきり自分だと思っていた雁兒の期待が裏切られたことへの反発によるものだが、頌蓮は雁兒のそんな反抗的な対応を放置していいの？

他方、陳家のしきたりを万事さばいていたのは執事の陳百順（チェン・パイスン）（周琦／チョウ・チー）。したがって、結婚2日目、頌蓮は陳百順の言うとおり、第一、第二、第三夫人への挨拶に回ることに。最年長者の第一夫人はさすがに女同士の権力争いを卓越していた（？）が、元京劇の女優だったという第三夫人の梅珊からは、体調が悪いことを理由に会うことを拒否されたから、アレレ、アレレ。梅珊のこの反抗的な態度を見れば、

彼女も召使いの雁兒と同じように、頌蓮に対する何らかの思惑がありそうだ。

他方、第四夫人を温かく迎えてくれたのは、第二夫人の卓雲（ジュオユン）（曹翠芬／ツァオ・ツイフェン）。「もはや自分は陳佐千の寵愛を受ける年ではない」と悟り切ったように、卓雲は新妻・頌蓮に対して親切にいろいろと教えてやっていたが、女心は微妙だ。とりわけ、

夫の愛の獲得を巡る妻たちのそれは格別なものだから、さて卓雲の本心は・・・？

■□■頌蓮の反抗は不発かつ藪蛇に！妊娠騒動の結末は？■□■

日本では、2023年に、よしながふみの原作『大奥』をTVドラマ化したSF時代劇が大ヒットした。そこでは徳川家光の娘・千恵役を演じた、私の大好きな女優・堀田真由が、赤面疱瘡によって死亡した家光の身代わりになり、春日局の奇想天外な提案、すなわち「大奥内での男女逆転案」を実行することによって、徳川家（の血筋）の存続を図る姿が描かれていた。もちろん、大奥は本来女ばかりの世界だから、大奥は將軍からの寵愛を待つ数千人の女たちの嫉妬と駆け引きのつぼだが、そこではまれに、將軍から寵愛を得られず、悶々とした生活を送る女が、大奥外の男性と浮気問題を起こす姿が登場する。

そんな物語を知っている私には、規模こそ「大奥」に程遠いものの、陳家における陳佐千を中心とする第一〜第四夫人たちの権力争い（寵愛争い）とドロドロした嫉妬心のぶつかり合いの姿は大奥と全く同じだ。また、梅珊は陳佐千が屋敷に出入りさせている高（カオ）医師（崔志剛／ツォエ・チーガン）と密かに不倫を・・・？

このような陳家における4人の夫人たち＋召使いの雁兒たちの争いの生態は興味深い。そんな目でスクリーンに集中していると、本作中盤で展開される次の物語にも、なるほど、なるほど・・・。

- ①朝早くから大声で歌い始めた梅珊の行動に文句をつけに行った頌蓮を見て、陳佐千が梅珊をかばったことに頌蓮が反抗すると、以降、陳佐千は梅珊の院に通うことになる物語。
- ②最上階にある小屋で何人もの人が死んだことを頌蓮が知り、陳佐千の前で話題にするも、うやむやにされてしまう物語。
- ③雁兒の部屋に雁兒の名前が書かれた赤い灯籠が掛けられていたうえ、頌蓮の名前が書かれ、針が刺さった人形が見つかる物語。
- ④父親の形見である頌蓮の笛が盗まれ、焼き捨てられていたのは雁兒の仕業ではなく、実は卓雲の仕業であったことが判明する物語。

陳家の第四夫人として嫁入りした当初こそ幸せの絶頂だった（？）頌蓮も、このような試練を受け続ける中で次第に精神的に参ってきたい。その結果、陳佐千が夜毎、卓雲の院に通うことに嫉妬心を燃やした頌蓮が打ち出したのは「妊娠告知作戦」だが、そんなことがうまくいくの？それが嘘だとバレたら、頌蓮は一体どうするつもりなの？

■□■飲酒はOKだが泥酔はダメ！頌蓮はなぜここまで錯乱？■□■

男でも女でも飲酒はOKだが、泥酔はダメ。ましてや意識を失い、錯乱のうえ、自分が

何をしゃべったのか、何をしたのかまでわからなくなってしまうのは言語道断だ。4 人の夫人の中では最も若く、しかも大学にまで進学していた頌蓮が陳家ででの新婚生活に絶望する中、誕生日を自分で祝うため酒を飲むくらいことは当然 OK。しかし、泥酔してしまった頌蓮が、そこで、梅珊が高医師と不倫していることを口走ったのはとんでもないこと。それを聞いた陳佐千は、梅珊と高医師の不倫の現場を抑えたいうえ、梅珊を最上階の小屋に連れて行ったから、さあ大変。酔いが覚めた頌蓮は卓雲からそれを聞かされて愕然とし、小屋に近づいてみると、そこで頌蓮が見たものとは・・・？

『菊豆』(90 年)では金で買われて楊家に嫁いだ鞏俐(コン・リー)扮する花嫁が、自ら不倫を働いたうえ、最後には嫁ぎ先の染物屋の建物と共に真つ赤な炎に染まるという悲劇に見舞われたが、それと同じように本作では、泥酔して梅珊の不倫を口走った鞏俐扮する頌蓮が錯乱しながら「人殺し！」と叫び続ける悲劇が登場するので、それに注目！もともと、本作の悲劇は陳家全体の悲劇ではなく、頌蓮だけの悲劇。その証拠に、本作のラストは、まだ幼さの残る第五夫人が陳家に嫁いでくる前を、錯乱した頌蓮が通り過ぎるシークエンスで終わることになる。なるほど、なるほど・・・。

■字幕に異議あり！なぜ京劇のセリフ表示がないの？■

私は『菊豆』を『郷 僕らの道しるべ』(23 年)『シネマ 56』11 頁)のプロデューサー兼女優の小川夏果さんと並んで鑑賞したが、本作は某大学の中国人の女性教授・O 氏と違う日にちで鑑賞した。50 代の O 氏は本作のことはよく知っていたが、未鑑賞だったため、私の勧めで本作を鑑賞した後、興奮気味に私宛にメールを送ってきた。そして、そこでは元京劇のスターだった第三夫人の梅珊が大声で語る京劇のセリフが全く字幕表示されていないため、日本人はストーリーの把握が不十分なのではないかと指摘されていた。

なるほど、そう言われれば、その通り。字幕表示は字数が制限されているため難しい作業であることは承知しているが、本作では字幕表示することは時間的に可能だから、それが全然できていないのは、多分当時少ししか輸入できていなかった中国映画の字幕表示人員(能力)が不足していたためだろう。その他、O 氏は多くの点で字幕表示の不備と不十分性を指摘していた。もちろん、その詳細は私には理解できないが、部分的には O 氏の言い分に一理あることが中国語を少し勉強している私にも理解できる。したがって、私としては字幕関係者の奮起を願いたい。

2025 (令和 7) 年 1 月 17 日記